

令和 2 年 5 月 27 日現在

機関番号：32653

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K12174

研究課題名(和文)在宅医療に移行した子どもを育てる親との協働に重点をおいた小児の訪問看護教育の開発

研究課題名(英文) Development of children's home-visit nursing education program focusing on collaboration with the parent's Child Care.

研究代表者

沢口 恵 (sawaguchi, megumi)

東京女子医科大学・看護学部・講師

研究者番号：10759161

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は子育てにおける親との協働に重点をおいた小児の訪問看護教育プログラムを開発することを目的とする。親を対象とした訪問看護師との子育ての協働に関する認識の調査、小児の訪問看護に関する研修に関する調査、訪問看護師を対象とした小児の訪問看護での困難なことにに関する調査を実施した。現在実施されている研修は小児看護の基礎知識や医療的医ケアに関する看護技術演習が多かった。小児の訪問看護において困難なことについて、親子関係への支援、親との信頼関係の構築があがった。そのため親とのコミュニケーション技術の向上を目指すため、研修方法にアクティブラーニングを取り入れると効果的なのではないかと考えた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

小児の訪問看護教育において小児看護の基礎知識と看護技術とともに、家族のアセスメントや親子関係への支援、子どもの成長・発達を促進するための具体的なケアの知識と、親との信頼関係の構築や親とのコミュニケーション技術に重点をあてた、アクティブラーニングを活用した教育を行うことで、看護の実践能力の向上を図ることができる。また地域において親子の意向を中心においた医療・看護が提供され、親子が見出したその親子らしい生活を実現することが可能となり、医療的ケア児と家族の生活の質の向上に貢献することができる。

研究成果の概要(英文)：At home the children with medical care needs has increased, the home-visit nurses is expected to support of the child care. However, there are a few home-visit nurses for children with medical care needs. For increase the number of nurses, children's home-visit nursing education program is provided. It is an important practice that nurses collaborated with parents for children with medical care need. The purpose of study was to development of children's home-visit nursing education program focusing on collaboration with the Parent's child care. It conducted three study; explore to recognition of parents about the collaborated of the child care with the home-visiting nurse, literature review of the education program of home-visit nursing for children, explore to difficulty by children's home-visit nursing. The results of the study was suggested, the necessity of training using active learning such as role play and case study.

研究分野：医歯薬学

キーワード：医療的ケア 小児 訪問看護 協働 教育

1. 研究開始当初の背景

近年の医療機器の開発や医療技術の進歩により、医療的ケアを必要とする子ども（以下、医療的ケア児）の在宅療養が可能となっている。全国の新生児医療施設で1年以上の長期間入院している子どもの動態調査¹⁾によると、NICUからの転帰として約2/3は在宅に移行しており、退院時に必要とした医療的ケアは気管切開、経管栄養、酸素療法であったと報告されている。また、人工呼吸器を必要とする長期入院児の数は年々増加し、2010年は約90人であったのが2012年には約149人と増加傾向にあり、最終的な転帰として在宅移行していることが明らかになった²⁾。以上のことから、高度な医療的ケアを必要としながら在宅に移行する乳幼児期の子どもの数は増加しているという現状があり、在宅で生活する医療的ケア児の支援を行う訪問看護師への期待は大きく、小児看護を実践できる訪問看護師の増員が望まれている。2010年の調査³⁾では、小児の訪問看護を実施している訪問看護ステーション数は約37%と少なく、実施しない理由として小児看護を担当できる職員が不足しているが多く、依頼があっても担当できる職員不足を理由に断わる、という結果であった。小児の訪問看護を実践する看護師や訪問看護ステーションが不足している現状に対して、各地で小児訪問看護教育^{4) 5)}が開催されている。

在宅移行した医療的ケア児を育てる親は、自ら地域に出向き仲間をつくる、また必要な社会資源の情報を収集し、選択・要請・活用しながら家族の生活をコーディネートする力を求められ、子どもの医療的ケアの決定をせまられている。小児の訪問看護を実践する看護師は、医療的ケアの実施や日常生活援助だけではなく親の意思決定を支援する必要がある。親とともに医療的ケア児を育てていくには親と協働する姿勢をもつことが求められ、小児訪問看護を実践する看護師は子育てを協働する姿勢や段階的な支援方法を習得する必要があるのではないかと考えた。現在実施されている小児の訪問看護教育は小児看護の知識が中心となっているが、それだけではなく親の意思決定を支える看護としての協働を教育に加えることで、地域での医療的ケア児の子育て支援の質が向上すると考えた。

2. 研究の目的

親の視点からの訪問看護師との子育ての協働を明らかにすることで、親が必要としている支援がさらに明らかになり、親の子育てする力に合わせた段階的な働きかけの内容をさらに具体化でき、その時期の親子にとって必要な支援の提供が可能になる。よって、本研究は親が必要としている子育て支援を明らかにしたうえで、子育てにおける親との協働に重点をおいた小児の訪問看護教育プログラムを開発することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) 親を対象とした訪問看護師との子育ての協働に関する認識の調査

医療的ケア児を育てている親の会の集会に参加し、グループインタビューを実施した。インタビュー内容は、親は訪問看護師の役割をどのように考えているか、医療的ケア児の子育てについて訪問看護師に期待していること、である。

(2) 小児の訪問看護に関する研修に関する調査

訪問看護に関する団体が開催している研修内容をインターネットにて調査した。

小児の訪問看護に関する研修について文献検討を実施した。

研修を実施している訪問看護ステーションへの聞き取り調査を実施した。

(3) 訪問看護師を対象とした小児の訪問看護での困難なことにに関する調査

小児を専門とする訪問看護ステーション以外の訪問看護ステーションで、小児の訪問看護を経験したことのある看護師にインタビューを行った。インタビュー内容は、小児の訪問看護を実施して困難だったこと、困難なことへの対処方法、である。

4. 研究成果

(1) 親を対象とした訪問看護師との子育ての協働に関する認識の調査

親の会の集会に参加した親 4 名に対してグループインタビューを実施した。子どもは幼児前期、小学生、中学生であった。4 名全員が訪問看護を利用していた。

親は訪問看護師に対して、子どもの医療的ケアの援助、入浴援助といった専門職として高い技術を提供する者であり、子どもに関する相談相手として認識していた。子どもの子育てについて看護師と協働しているという認識はなく、子育ては親の責任であり、看護師は専門職として子育てを相談できる相手として認識していた。

(2) 小児の訪問看護に関する研修に関する調査

小児の訪問看護に関する研修は、NICU からの在宅移行支援に関する研修と訪問看護師を対象にした在宅医療・看護に関する研修があった。研修の方法は講義と演習であった。

①NICU からの在宅移行支援に関する研修

講義では新生児医療の現状、保健・医療・福祉制度、関係職種との連携、家族への支援、訪問看護の実際といった内容であった。演習では呼吸の観察、心肺蘇生法、ポジショニングなどの理学療法、経口摂取、経管栄養を実施していた。また意思決定支援に関するディスカッション、小児の訪問看護への同行による演習と演習後の情報共有もあった⁶⁾⁷⁾。

②訪問看護師を対象にした在宅医療・看護に関する研修

講義では、疾患と病態生理、小児看護の現状と課題、小児在宅医療の現状、保健・医療・福祉制度フィジカルアセスメント、呼吸管理、栄養管理、小児訪問看護の実際、発達支援、家族への支援、といった内容であった。演習ではフィジカルアセスメント、人工呼吸器の取り扱い、ポジショニングなどの理学療法、吸引、経口摂取、経管栄養を実施していた⁸⁾⁹⁾¹⁰⁾¹¹⁾。また、近隣の訪問看護ステーション間で同行訪問、電話による相談、事例検討会を行っている地域もあった。

講義では小児看護、小児の訪問看護に関する知識を中心に講義をしており、演習ではフィジカルアセスメント、呼吸管理、栄養の管理に関する看護技術の実施をしていた。小児看護の経験のない看護師は、小児訪問看護の知識不足として、小児の特徴、小児の在宅医療の現状、フィジカルアセスメント、家族とのかかわり、医療的ケアを挙げている⁸⁾¹²⁾。研修会の内容は訪問看護師のニーズに合わせた、小児看護の知識不足を補う内容となっていた。事例検討などディスカッションを行う研修は、地域の訪問看護ステーション間にて数名で行われていたが、その他の研修会では実施されていなかった。

(3) 訪問看護師を対象とした小児の訪問看護での困難なことにに関する調査

訪問看護師 2 名にインタビューを行った。訪問看護経験年数は 10 年以上で、小児の訪問看護実施年数は 9 年以上であった。

小児の訪問看護実践時の困難なことについて、親と子どものそれぞれに困難なことがあった。親に対しては【親との信頼関係】【親のニーズと看護師の考えのすり合わせ】【愛情を促すかわ

り】【子育てに関する情報不足】があった。子どもに対しては【成長・発達を促すケア】【子どものニーズの把握】であった。

小児の訪問看護は子どもの医療的ケアや日常生活への支援といった、子どもの体調管理や成長・発達に対する看護とともに、親の子育てする力をつけていくための看護が行われている。特に親の精神障害や若年妊娠・出産などの理由で、親の子育てをする力が不足している場合は、子どもへの看護とともに親の子育てへの支援が重要になってくる。また家族関係が複雑な場合は、子どもを取り巻く家族関係のアセスメントと支援が必要となる。親が子どもを育てる力をつけていく過程において、親子関係の促進をすること、子どもの命を守りながら親のニーズに合わせた子育てを支援するために必要なことを見出していくことについて困難を感じるのではないかと考える。今後さらにインタビューを実施してデータを増やし、困難なことと対応を明らかにしていく必要がある。

(4) 小児の訪問看護教育プログラムの検討

現在実施されている小児の訪問看護教育プログラムは、小児の特徴と成長・発達への支援といった基礎知識、人工呼吸器の取り扱いといった看護技術といった研修が行われており、事例検討など小グループに分かれてディスカッションを実施する演習は少ない現状である。臨床での困難なこととして、親との関係や子どもの成長・発達への支援が明らかになっている¹²⁾ことから、家族のアセスメントや親子関係への支援、子どもの成長・発達を促進するための具体的なケア、子育てに関する情報を含める必要がある。また、親との信頼関係の構築や親と看護師の考えをすり合わせていくためのコミュニケーション技術が必要であると考え。親子関係への支援、親との信頼関係の構築、コミュニケーション技術の向上を目指すためには、ロールプレイや事例検討といったアクティブラーニングを取り入れると効果的なのではないかと考えた。

<引用文献>

- 1) 研究代表者田村正徳：平成 22 年度厚生労働科学研究費補助金成育疾患克服等次世代育成基盤研究事業「重症新生児に対する療養・療育環境の拡充に関する総合研究」2010。
[<https://mhlw-grants.niph.go.jp/niph/search/NIDD02.do?resrchNum=201018001B>]
- 2) 研究代表者田村正徳：平成 23-25 年度厚生労働科学研究費補助金地域医療基盤開発推進研究事業「重症の慢性疾患患児の在宅での療養・療育環境の充実にに関する研究」2013。
[<https://mhlw-grants.niph.go.jp/niph/search/NIDD02.do?resrchNum=201325033B>]
- 3) 全国訪問看護事業協会。平成 22 年度厚生労働省障害者総合福祉推進事業「医療ニーズの高い障害者等への支援策に関する調査」2011。
[<https://www.zenhokan.or.jp/wp-content/uploads/H22-4.pdf>]
- 4) 近藤政代(2005)．訪問看護を必要とする小児の地域での暮らしを支えるために 小児訪問看護研修を企画して．訪問看護と介護，10(3)．192-199.
- 5) 澤田和美(2003)．小児訪問看護に必要な知識と技能．訪問看護と介護，8(5)．366-372.
- 6) 日本看護協会 2018 年度小児在宅移行支援指導者育成研修
[https://www.nurse.or.jp/up_pdf/20180803112433_f.pdf]
- 7) 品川陽子(2012)．小児在宅ケアに関する教育プログラムの検討．大分県立病院医学雑誌，39．35-40.
- 8) 生田まちよ，宮里邦子(2013)．訪問看護師を対象にした在宅人工呼吸療法を行う障がい児の訪問看護研修プログラムの開発とその評価．熊本大学医学部保健学科紀要，9．11-26.

- 9) 近藤奈緒子, 豊田まゆ美, 矢島道子, 岡部明子, 望月洋子他 (2013). 小児 (重症心身障害児) への訪問看護ができる人材育成方略に関する検討ー「訪問看護経験 (支援) 表」を活用した同行訪問による支援の評価ー. 日本看護協会論文集地域看護, 107-110.
- 10) 日本訪問看護財団 2019 年度小児訪問看護 (医療的ケア児等) の基本と演習
[<https://www.jvnf.or.jp/katsudo/kensyu/2019/program-h.pdf>]
- 11) 全国訪問看護事業協会 2019 年度はじめよう小児の訪問看護 (基礎編) ～小児訪問看護の魅力を知ろう～
[<https://www.zenhokan.or.jp/wp-content/uploads/syllabus7.pdf>]]
- 12) 生田まちよ (2015). 超重症児の在宅移行に際し訪問看護師が抱える問題点. 小児保健研究, 74(3), 467-473.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Megumi Sawaguchi
2. 発表標題 Collaboration between Visiting Nurses and Parents Related to Child Rearing of their Children Requiring Medical Care. ~ Partnering for Child Rearing~
3. 学会等名 International Family Nursing Association (国際学会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----